

幼稚園の一年間

お茶の水女子大学附属幼稚園

たのしい 目

村田修子

本来の姿を出してくる。この時期は大体五月のはじめ頃にやつてくれる。今までスマースにはこんでいたことすべてがうまくいかなくななり、たいへんに扱しにくくなり、またいへんにいそがしくなる。先生にとつてむずかしいばかりでなく、子どもの側からいっても危機といえる。

幼児と生活していると、一年というものが
またたく間に過ぎてしまう。常に新らしい為
の幸とでもいうのだろうが、それだけにそ
の成長の変化が一緒にいるものにはつかみに
くい。写真などをみて改めて驚くということ
になる。

みると共に、或る時期のたのしくすぐせた日々のことを思い出してみたい。

○三才児のすがた

り、目いっぱいに警戒心をみなぎらせてにらみつけていた人たちが、だんだんに友達の名前を覚えたり、幼稚園の環境とか、その動きやようすなどをのみこんでくると、今まで警戒するために着ていたベールをぬぎすぎて、おもちゃのとりあいなどのけんかも始まり、

で思うようにできる気軽さの方がなつかしくなり、幼稚園にくるのがめんどくさい気持になるためである。

その頃のようすは、本当にあつという間にことがおきてしまう。たとえば、まっすぐあらいていった先に他の人がいれば邪魔になるためである。

て私に名前を呼びかけられると、『おやつ、どうして知っているのかしら』『おやつ、ぼくを知っている人がいるぞ』と不思議そうに目をきょろきょろさせたり、にこっと笑ったり、心からそうござりまつりこんで（まつりこんで）

その原因は必ず第一に、初めての集団生活に多かれ少なかれ緊張して過しているためにつかが出てきた、ということ。次に各々が本来の姿を出して思つたとおり勝手な活動をするので、したがつてけんかなどが多くなり、自分の思う通りにならない人たち、家で思うようにできる気軽さの方がなつかしくなり、幼稚園にくるのがめんどくさい気持になるためである。

で、ドン、とつきとばしたり、「あの人と遊ぼう」と思うと、そばにいっていきなりポンと親愛の情をこめてたいたたり、自分が言おうと思っているのに隣の人が先に話し出したりすると相手の口をおさえてしまったりするし、やられた側はやりかえしたり泣き出したりするので計画などは中断されたりうまくはこばないときの方が多い。このようなことが再三になると、言ってきかせたり、文句の一つも言うことになるが、私のわいかおとは関係なく、可愛いいようすで「せんせい、どうしたの」とか、全然関連のない「昨日パパがおみやげを買っててくれたのよ」ということになると、改めて三才児だったことを思い出し、おとなげない自分の姿に苦笑してしまうのである。

このけんかも六月の後半頃から幾分やわらかみを帶び、衝動的・突發的ではなくなって意見の相違がだんだんに盛り上つていって遂にはけんかになる、というようにかわっていく。それにお互がそれぞれの持ち味やくせ、傾向などを幾らか知つてくるので、けんかになる前に相手によつてはよけてしまつたり、いいあうだけで終りになつたり、片方が妥協

していくのでかえつて遊びがおもしろく発展したり、ぐつこらえてしまう、というようとそのままはこびが直線的でなくなつてくる。

けんか一つを考えてみても、このように進歩が目にみえるほどであるから、まして生活全般にこのことがいえる。

こうなつた時に迎える夏休みは楽しいといふより最初は心配なことらしい。「どうして幼稚園にいかないのか」「自分でいかないのではないかだろうか」と、夏休みの初めの日、お母さんといっしょにたしかめにくる人がよくある。きてみて昨日と違つた活気のない園内のようにすでやつとなつとくする。

このように友達とのつながりができる、一人よりも友達と遊ぶことのほうがおもしろくなつてきて幾分じつようずに遊べるようになるという変化は一大転機といえる。この大切なことをうまく身につけさせるのを主眼としたのが一学期である。

だからその大切な目標に達するべく六つの領域に含まれることを内容として進んでいくが、常に「たのしく」ということが一番もどか「今のはカラーですか 白黒ですか」
「カラーです」といっているうちに、へやの外へまでうつしにある人や、一隅におみせやさんの台とか椅子で店をつくり始めた。そ

中でのすごし方などが身につき、すべてが軌道にのつた二学期、三学期については、「たのしかつた日」についてあげてみたい。

○たのしかつた日

「たのしかつた」と感じるのが子どもの立場から考えたときと、おとなの方から考えたときなどいろいろあるが、ここでは計画しているなかつたことが何かをきつかけとしてどんどん発展し、それにひたりきつてたのしく遊んだ本当に数えるほどしかない日のことを書いてみたい。

写真屋さんあそび

二学期の或る日 実習生が空箱と色セロファンを使って写真機を作る計画をたてた。子

どもたちは材料をみただけでセロファンを通して明るい方を見たり、二枚重ねたり、違う色を重ねて見ては驚いていた。三才児はこれでもう充分にいろいろな経験をしているわけであるが、「写真屋さん、うつして下さい」とか「今のはカラーですか 白黒ですか」
「カラーです」といっているうちに、へやの外へまでうつしにある人や、一隅におみせやさんの台とか椅子で店をつくり始めた。そ

できあがった写真“せんせいのかお”



同じような遊びが自然にくりひろげられた。

三月上旬に今度は私の方でこの遊びに持つ

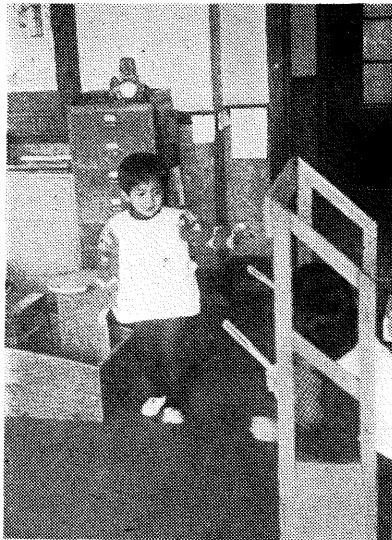
ていこうと計画した。場所を作り環境を整え、働きかけをしてみたが、その日はなかなか

かそれにのってこないで、しつらえた場所は鉄人ごっここの家にされたにすぎず計画は完全に無視されてしまった。

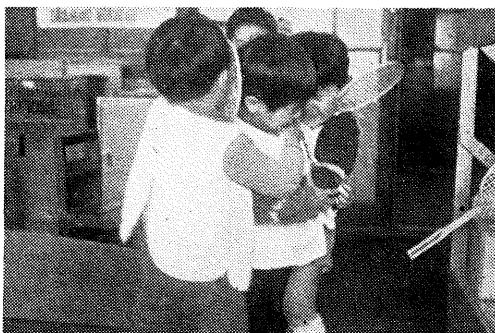
むずかしい程度の高い遊びも、持つていき方によつては無理なくやることができるが、その反面、自分たちで遊びをみつけて自由に遊べるようになると、前と何のつながりもない

ここで「こんにちわ、うつして下さい」とその中に入りうつしてもらうと白い紙をくれるので、「先生はいまお顔をうつしてもらったのですが、うつらなかつたのですか」というとA「ちょっとお待ち下さい」ということになり、今まで人の顔など書いたことのない人、書く人がすきでない人までみんなが人らしいものを書いて「おまちどうさま」と持つてくれる。この遊びはたしかに程度が高いが、案外これをおもしろがつて全員が参加して一時間以上も続けられた。この遊びはその日を山としてそのあと二日づけられた。

三学期の初めにしまつておいたこの写真機を一人がみつけたのをきっかけにして、前と



鉄人がやってきた



みんなで鉄人をやつける

い計画とか、その年令にあわないものは子どもの興味をひきつけるのがむずかしいことを今更のように感じさせられた。

鉄人ごっこ

それにかわりその日は鉄人ごっこが始まった。一人が片手の指先にビニールのカラーテープをはりつけて怪物になつて他の人を驚かせてあるいたのをきっかけに、われもわれも

みんなで鉄人になろう



と机の前でその作業が始まられた。その時は本当に自然の姿でひき出しからはさみを持ってきて友達同志で「その色かして」「この色のいる人」というようにもスムースにはこび、また、どうしたらこわくみえるか、といろいろくふうして殆んどの人がこわいものになり、暫くおいかけたり追われたりして遊び、それがすむと、「もう鉄人ごっこやめた」と屑入れの前でその爪をとっていた。その間、殆んど私の入る余地がないように、一日が自分たちの計画のもとによどみなく流れ、しかも内容的には製作・社会・言語といえる経験

もうおしまい



こわい鉄人なんだぞ

がちゃんと盛り込まれているのである。このときの「ああいうようによしよ」という意欲に溢れた顔つきは忘れることができないほどいきいきとしていた。

○劇あそび

もう一つ、組全体が物語り遊びの気運に向いていた三月の初め頃、全員でその遊びが始



まつた。子ども同志の話し合いが「七匹の子羊」だった為、子どもではなり手のない狼に私がひっぱり出された。狼が池に落ちてあやまるまでを三回ぐらい続けてやりかえし、まだ続いているので、どうとうやりきれなくなつて「みんなはあとどういう話しを知っているの」というようにもちかけ、狼の出てこない話しの劇をするよう

に方向づけたところジャングルジムをこびとの家として、白雪姫ごっこが始まった。みていると自分たちで

数多い役割を長い時間かかってきめ、一度すむとかわりあって何度も同じことを繰り返して二時間近くも続けられた。その間やはり私の入る余地はなく、ただ近

くにきた人に「どうなりましたか」「あなたは今何ですか」と聞くぐらいであつた。教師がいくら縦密な計画をたても、このように全員をひきつけることはなかなかできない。子どもの中から、やろう、という気の出てきたものはそこで年令相応の指導をちょっととさればどんどんと発展し、楽しみながら思わぬ成果をあげることができることを、このことごとにによって改めて認識することができた。

これから考へても、幼児は、特に三才児は無理に計画にはめこんで引っ張っていくよりも、その裏にある教師の計画が幼児には分らぬようにならなく自然な活動の中に生きていくようになることと、自然に発生した事柄の中指導すべき面を見出して、適切な処置のとれる柔軟性の大切さをひしひしと感じた。

『よいしょ』と低鉄棒のでき
ないおともだちのおてつだい

